

進むリゾート開発と環境破壊

推進される政府観光ビジネス

インドネシア・バリ州のペニダ島で進むリゾート開発が、島の自然環境に深刻な影響を与えている。観光業の拡大を目的としたホテルや施設の建設が相次ぐ中、森林の伐採が進み、島の生態系のバランスが崩れつつある。住民や環境団体からは懸念の声が上がり、今年3月と5月には豪雨による土砂崩れが発生していくつかの森の道が閉ざされるなど、森林破壊の影響が現実の



観光向けビーチ開発が進むペニダ島

ものとなっている。政府は観光業を経済成長の柱として推進しており、ペニダ島の開発もその一環として進められているが、その代償として緑豊かだった島の景観は大きく変わ

りつつある。かつて鬱蒼とした森が広がっていた地域が開発のために伐採され、地表の保水力が低下したことで降雨時の土砂崩れの危険が増している。島の住民によると、以前は比較的安定していた土地も、森林の減少により脆弱になり、大雨のたびに土砂が流れ込みやすくなったという。森林伐採の影響は陸地だけでなくとどまらず、海にも及んでいる。観光客の増加に伴い、ゴミやプラスチック廃棄物が海へ流れ込み、海洋汚染が進行しているほか、近年はダイビングブームによる影響でサンゴ礁の損傷も問題視されている。ペニダ島周辺のサンゴ礁は生態系の重要な一部だが、ダイバーが触れたりフィンで傷つけたりすることで白化が進み、一部のエリアでは回復が難しくなっているとの報告もある。

インドネシア政府はリゾート開発を引き続き推進しており、環境保護のための規制は十分に整備されていない。島の環境を守るためには森林の保護や土地利用の見直し、廃棄物管理の強化などが求められるが、現在のところ具体的な対策は講じられていない。ペニダ島がこのまま開発の波に飲み込まれ、観光資源そのものを失うのか、それとも持続可能な形での観光モデルを確立できるのか、今後の動向が注目される。